

# おおやまと

大倭出版局・大倭紫陽花邑

令和4(2022)年  
1月号  
通巻617号  
毎月23日発行  
(題字 矢追日聖)

★発行日 令和4年1月23日  
★発行所 大倭出版局  
〒631-0042 奈良市大倭町1の12  
☎(0742)45-1192  
★印刷 大倭印刷 監  
★定価 1部 300円  
年間購読料3,500円(送料共)  
★郵便振替 01050-6-67002  
大倭出版局  
URL <http://www.ohyamato.jp>



東シナ海の上空、火の鳥のような雲

奄美大島龍郷町在住 大江 強さん撮影(文・8頁)

昭和42(1967)年1月23日 月次祭法話より

## 本当の日本精神とは — 大らかにして和やか —

法主 矢追日聖 (満55歳)

### 法話を上滑りに聞くだけ

年あらたまりましておめでとござい  
ます。

昭和四十二年の初めての月次祭でござ  
いますから、何か変わったお話でもすれ  
ばいいんですけどもね。こうして三分  
ばかり皆さん方にお話し申し上げるの  
は、別に私の役目でもないものの、大倭  
教として発足して足掛け二十二年の間、  
紋切り型に繰り返してきております。

ところが一方的に流しても、それを聞  
いておる方が、どれだけ受け取ってお  
かど、情けのう感じる面もあります。と  
いつて別に押しつけて分かってほしいと  
いう気持もございませぬ。宗教は原則と  
して求めるところにあるんですからね。

しかし今の月次祭の法話の場合、上滑  
りな行き方だと私自身も思う。あまり皆  
さん方の心の中にとまらない。時々こう  
いう紋切り型の法話は止めたらどうか  
と、今日まで何回か思ったことはあるん  
です。

けれども、ここに並んでおる肉体を持  
ったあなたたちの背後に、皆さんの先祖  
関係からはじまって、大倭のひとつの霊  
の世界における何万何億という姿のない  
人たちが集って来ております。毎月二十  
三日のお祭りは、霊界と現界が共に修養  
し、共に楽しむという行事になっておる  
んです。集ってくる霊界人たちの気持を  
考えればむげに止めるわけにもいきませ  
ん。

私の話を、現界の人たちは声を通して言葉を聴いています。だから話はまずいし理解しにくいこともあろうし、その点私の不徳ですから仕方がないと思うんです。が、霊界人は言葉を聞いておりません。私の心の中の働き、念というものを聴いてくれている。言葉に表現できないような思いも霊界人は聴いてくれているんですね。

それで昨年暮れあたりに、法話の後で座談会をするという形を発想しました。皆さん方がどの程度受け取っておるか。そして私の話の分からないところはもう一度、皆さん方の認識において話し合いをし検討し、分かるようにしてほしいと思っただけなんです。

それで私もそばにおつて何回か座談会を聞いておりますけれども、本当に求めようという話し合い、心の底をえぐったような宗教の本質的な質問などは割合にあります。皆遠慮されるのかどうか知りませんが、あまりにもお上品すぎるんですね。

私の見ているところでは、宗教あるいは信仰を持つという最初の動機には、例えば迷うとか悩むとか、あるいはどうしても考えが及ばないとか、これやったらもう死んだ方がましやとか、必ずひとつの原因があるはずなんです。ある程度深刻なことにぶつかって初めて宗教の道に入るとか信仰に飛び込むとかね、それが多いんです。これ日本の場合ですよ。

私個人に対していろいろ話しかけてこられる場合は、現実的な切実な問題がほとんどです。しかし座談会のような、皆集ってお互いに検討し合うて、宗教的に向上をはかっているという雰囲気の場合になると、そういうようなものは影を潜めて何かしらお上品ぶった話し方になってしまう。現実の問題から離れた観念的な話が多いんですね。

これではあまり他人行儀すぎて面白くないと思うんです。

## お互いに「おらから」とつ

大倭でも、便宜上、信者とかあるいは信人とか申しておりますけども、本当の私の気持というものは、皆「同胞」なんだ。大和言葉に直したら「はらから」ということなんです。皆、一人の親から出てきた子どもなんだ。

縦の関係においては親と子であり、横の関係においては全部が兄弟という結びつき。これが日本の形だと思うんですね。

信者と言うと、向かい合っておる片一方は教化伝道していく指導者で、片一方はそれに追従し教えに付いていくというような形で、一般の宗教団体はそうなんです。私はそれがものすごく嫌なの。日本の精神に反するんです。親と子の結びつきにおいて、どこまでも親は親の位置があり、子は子の位置があるとしても、親やから偉いというわけやない。

頭の程度になってくると親がぼんくらで息子の方が偉い、学問もできる、人間しっかりしているとそういう例はたくさんあります。それにしても親は親であり、子は子であるという縦の関係ですけども、横の関係においては全部ずんべらぼうの平等なんです。そういうものが日本の家族であって、制度でも主義でもない、誰が決めたんでもない、そういうように出来ているんです。これ神ながらに出来ているんです。

日本の宗教の場合、どこまでも対々なんです。一番の大神さんというのは、おおみおやさま、親さまで。我々は子どもなんです。そういうような親と子の関係だから、神さまと言うても切り

離れた天国におる神さんではありません。

大倭のような宗教のひとつの小さいグループにおいては、私が親さんの代わりになっている。ついてくるあんたたちは子どもとして、親と子の関係なんです。だからして上下がない。親の位置、子の位置が違うだけです。

兄弟ずらつと並んでも兄貴が一番上で弟は下に座るんです。何も偉いから上になる、あかんから下になるというんじゃないに、やっぱりこの世の中に先に生まれたら一番上に座らせ、後に生まれたら下に座らせる。それは日本の場合には何も矛盾じゃない、権力や実力の相違じゃない、順序なんです。

世の中には全て順序がなければ、ひとつのまとまった秩序がなくなつてケンカばかり起こつてしまう。その順序を決めるのは、日本の場合には親とか子とか孫、兄とか弟、あるいは姉とか妹です。偉いとかあかんではないんです。

そういうようなものが、日本では制度のような決めつけやなしに自然に出来てきている。元々からそう出来ているんです。

大倭の場合もあなたたちを信者と言え、私は教師だという間柄になる。それは嫌なんです。はらから、同胞でなきやいけない。私は一応親の役目を務めてる。あなたたちは子どもになるわけですが、いわゆる信者の中において私以上に人間的能力、学問もあるという方がたくさんおられるだろうし、私は何にも偉いと思つてない。

立場の問題なんです。今日、私は大倭教という名称を使って、大倭の大親元おおやまとの教え、いわゆる神ながらの、日本の伝統的な古い宗教を現在に再現させていかなきゃならない。私はそういう宿命できておりますから、皆さんから見れば親の立場、皆さんは子どもの立場にあるんです。

## 社会を浄化していく力に

そういう私も皆さんも一体となって、大倭というものが、霊界から来る流れも現界の流れもあるという自然の流れの中において、社会に向かって浄化作用していく力できなきゃならんと思うんです。これはもう、政治とか介入させないで宗教でいくのが一番力強い。本当の宗教の立場において、いろいろな動きをしてみたいと思う。またしなればならない。

その順序として私は足掛け二十二年間の総決算を言うんですが、あなたたちは大倭へ来た以上、一番最初に自分を自分で治めるということ。私は「何をせえ、かあせえ」と命令はしませんけれども、先ずしなればならないことはそれです。

社会は個人の集まりですから、人間一人ひとりが自分で自分を治めることができなければ、皆が喜んで幸せに暮らせるような社会にならないということなんです。これはどの宗教でも同じように言うんですが、私は特に神ながらの宗教として考えるんですね。

我々は、ひとりで裸で生まれてくる。そして、地位があり名譽があり財産があっても死ぬ時には三昧の煙となって白骨になってしまう。出発と終点は皆が同じなんです。そういうように孤独で生まれてきて、孤独で死んでいく。この原則は誰もはずすことはできない。私が言わなくても決まりきったことです。

その時に何が一番大事かと言えば、自分というものを自分で治めていくことです。それにはどうすればいいかという問題なんです。

たった一人でオギヤアと生まれた人間がヨチヨチ歩きになると、次には自分以外の人と付

き合って社会が出来る。一番先に親と子がひとつの社会を作って、その親と子の家族のグループがまた隣りの家族のグループと一緒に暮らす。段々輪が大きくなって社会、国あるいは世界、人類になるんです。

個人で生まれ、家族という身近な社会の一員になる時、一番親しくなるのは順序からいくと親です。次にはそれ以外の人と付き合っ社会人にならなきゃならない。社会でお互いに仲良く幸せに暮らすためには、先ず自分を自分で修養する。それには宗教が全ての出発だと思っんです。

ところがねえ、自分のことよりも他人のことを先に考える人が多いと思っんです。とにかく二言目には世間世間と、我が身自身のことよりも世間のことに重点を置く。家の中でこんなことしとたら世間に笑われるとかね。

そこへもって世間の人に対し背伸びして優越感を持ちたい。人よりもよう見せたい、力がないのに力があるように見せたい、偉く見せたいとかです。

もし自分を治めてから周囲のことを考え社会のことを考えるのであれば、それだけ余力があるのだから非常にいいんです。けれども、自分というものをあまり考えていないというのが、日本人の悪い癖だしひとつの欠点です。

大倭の場合でもね、これが言えると思います。まあ私に力がないのであって、皆さん方の問題やない、私自身の問題なんです。

### 人間的修養のやり方

個人主義で言うんじゃないんですけども、人間的に修養して自分を向上させていくことに重点をおいて考える。それには、一番最初腹を立てない

ということなんです。いかなることがあってもね、感情に走らない。

人間はみんな感情があるから腹も立つんです。が、今まで十ぺん腹が立ったのが五回になるようにとかね、稽古するんです。これは修養によってできるはずなんです。

私の腹を立てたことは、皆さんはあまり知らないだろうと思っんです。私も氣短で腹立てたんですよ。腹の立つものを持つてますから、あなたたちの腹を立てることもよく理解できます。けれども私の場合、腹を立てるようなことがまだ起こってないだけです。修養によってそうなるんです。何も生まれつき神さんでも仏さんでもない。あなたたちもできるんです。

今言うようにね、一番先に腹の立てないよう訓練していくということ。

その次はどうかと言うと、人と人と仲良くしていく稽古をする。それには相手と自分を、お互いに理解しようということですね。最初に練習するのは夫婦と親子が一番いい。もう毎日できる。わざわざどこかに行かなくても、神さん仏さんに手を合わせに行かなくても、大倭のここへ出て来なくても、ほんまの修養ができる道場は家庭にあるんです。

じっと見てますと、まあまあ穏やかな家庭は案外少ない。何かしらそこに割り切れないような雰囲気がある、普通の家庭によくある。ということは家庭の問題を、私に相談に来られるから言うんですが、それはお互いに修養によって直っていくと思っんです。

元々から滅多に仲の悪い者ばかり集まらない。深い浅いかの何かの縁によって夫婦や親子という形になっているのだから、お互いそこに溶け合うものがある。理解し合うたら必ず円満にい

けると思うんです。

大倭へ来られて、あなたたち個人個人が人間的に一步でも前進し向上していく。それが一番大きな利益だと思っんです。

病気の相談とかいろいろ受けますが、こんなものは私の余興であって宗教の本質ではありません。誰でも苦しい時には神さん頼みで、それはそのままでもいいんですよ。けれども、その半面において人間的な修養というものがなけりゃいけない。

迷う心とか悩む心、あるいは人に対し怒るとか腹を立てるとか、そういう心は人間皆が持つてゐるんです。その代わりまた喜ぶ心も持つてゐます。その中においてお互いに皆、仲良ういける自分にならなければいけない。

そしてまた次は、死ぬ時ということになります。それが宗教の入り口であり終わりであります。皆と仲良うしておる人が死ぬ時には、心残りなく喜びを持つて死んでいけると思っんです。

ところが自分の人生に不平不満があったり、世渡りをしていく中で人といざこざ起こしたり争ったりという一生を送るような人は、死に際にはまあおそらく加減悪い。喜んで死んではいけな思っんです。

## 心の栄養を吸収する場

仏さんの世界といい神さんの世界といっても、皆が和気あいあいとしたような仲のいい人たちの集まりを言っているんです。これは仏教の理想でもあり、キリスト教の理想でもあり、何も大倭で言うだけじゃありません。どこの宗教でも同じでしょう。

それを、皆さんがただ頭で聞いて、月次祭のよ

うな雰囲気では「ああ、そうだな」と思ってるけども、家に帰ったらもう昨日のケンカが続きをやるというようなことでは何にもならないんですね。聞いたことを本当に自分の心の栄養としてやっていかなきゃいけない。

月に一回、二十三日のお祭りはひとつの修養の場であるんです。祭典行事というものは猿回しのようなもので形式だけなんです。どれだけ立派な祭典をやったからいうて、人間誰ひとり幸福にならない。それよりも先ほど私が言うたような話し合いをすれば、その方がご利益がある。目先のご利益でなく、自分の心に栄養を吸収するわけです。肉体の栄養は食生活で、それについてはみんな考へておられるでしょう。その肉体と人間の心、精神とは裏表ですから、やはりバランスがなけりゃいけない。心の栄養というものに無関心じゃいけないんですね。

そこで仕事や生活で忙しいかもしれないけれども、何とか練り合わせる事ができるとか、余裕のある方はですね、霊界人もあなたたちの先祖さんも皆集つておるんですから、そこにおいてお互いに話し合う。これは私個人のためじゃなしに、皆のために言っんですがね。

神ながらを主体とした宗教は幅が広いんです。大倭教に限らずどんな宗教の人とでもいい、皆が寄り集まって自分の心の中にあるわだかまり、心の罪を削いでしまふ。いわゆる禊すすぎということですから、そういう場にしたいと思っんですね。

自分たちの疑問のあること、あるいは腹の立つた話でも、ケンカした話でも、何でもかんでも皆の前で平気で自分の考え方や思惑をさらけ出して、誤りがあれば直してもらおう。また人の話を批判してもいい。そうして、できるだけ月に一度はそういう場で、心の栄養を吸収していく。

神ながらの宗教に即した人間、日本人らしき日本人の日本精神というのは、言い換えれば、大らかにして和やかだという「大和」の精神なんです。爆弾三勇士のように敵の中に飛び込んで名誉をたてたというようなのは、日本精神でも「大和」

の精神でもない。大体戦争するということも日本精神には反するんです。仮に荒ぶる神があったとしても、徳をもってその荒ぶる心を抑えていく。結局は仲良うして包容・徳化していく。徳によって相手を帰依させていく。心の広さによって相手を包むという行き方、本当はこれが日本精神なんです。腕づくや武力で相手を屈服させるというのはちがう、それは霸道ですよ。

大倭は、いわゆる日本精神を高揚しますけれども、これは宗教心と結び合わせていいと思っんです。「大和」の精神とは、大らかに和やかなという意味で「やまと」なんです。「おやまと」「おやまと」に通じて、親と子の心の結びつきになって、平和社会を作つていく根本的なものだと思っんです。

そういう大倭の流れの中に自分も溶け込んで、どうすればいいか。一人ひとり性格も違う生活環境もちがう日日の生活の中における、また家族や社会の中における具体的な実際問題について皆が検討してほしい。

いつも私から一方的に流すんじゃないに自分の問題として取り上げて、今日一日大倭の充分な栄養を吸つて帰つてほしい。

今までのような座談会では、ずっと最後まで一言も言わない人もあります。ひとつね、リーダー格の人たちは皆が発言して、思惑を心安く言えるような雰囲気にもつていってほしいと思っんです。

じんずうりきによせ  
 「神通力如是」の真意をさぐる 第十七回 大倭教の源流にさかのぼって

「神通力如是」は昭和16年11月6日にはじまり12月8日に至る33日間の神語りについての法主による詳細な記録です。それに先立ち法主は10月30日から11月5日までの間、「鶏杜御神苑(大倭神宮)に於て妙法による眞の禊」を行い、翌6日から、「神通力を許され靈覺を得た」妻の妙月(輸齋)に示現された靈界からの御託宣を記録して後世に遺すことになるのです。

神語りを終了した12月8日は奇しくも日米開戦の日に当たり、開戦に向かう緊迫した社会状況が随所に感じられる記録になっています。

今回登場するのは、これまでの続きで倭姫と奇稻田姫で、山神についての興味深い語りがあります。

次回を少し予告しておく、「太子」と「中將姫」が登場するという意外な展開になります。この太子と中將姫をめぐる物語りは、「神通力如是」の中での重要な部分になっていて、この後も何日にもわたって続いていきます。

今回は紙面の関係もあって、原文のみを紹介し、現代語訳は次回に載せることにしましたので御了承下さい。

原文

十一月十四日 午前九時 於鳥見庄山

「倭姫、オン前二ハベリ候。

コノ山ニ棲ム山神、今朝ホド申シキカセシニ、汝等マダ来ルカ。退散イタセ。汝ガ行ヲシタケレバ禮儀ヲ以テ出デマセイ。無禮モノ、サガレオルゾ。サガレ、ケガラハシイ。汝、眞ノ妙法トナヘ題目供養ウケテ行ヲ果セシ其時ハ、コノ正シキ妙法ノ末座ニ加ヘトモニ出シクレン。マダマダオ前ラノ出ル時デハナイ。ドノヤウニ変化シテコノ倭姫ヲ迷ハサウトモ、吾ガコノオモイ、退散イタセ。吾モ題目供養ヲウケトモニ大倭日高見國ヲ生マシメンガ為ノ大仕事、トモニカニナレ。コノ山ノ守護神トシテ祀ツテヤルホドニ、題目ヲ唱ヘ。ワカツタカ山ノ神。カヘレ、カヘレヨルウヅ」

「奇稻田姫命、倭姫オンモノ申シ奉ル。コノ山ニ棲ム山神、悪魔ト變化シコノ正法立テル邪魔立イタスニヨリ、吾レ獨リノハカラヒニ候ヘドモ退散イタサセマシテゴザリマスル。シバシノ間ニ候ヘドモ穢シ事ヲ耳ニ入レ、倭姫オン詫ヒ奉ル。拙ナキワザニテ候ヒシガ神樂、奏シ申サン」題目、神樂。

「君カ代ハ、千代ニ八千代ニ壽キテ、大

八洲嶋、秋津嶋根ノ日本ヲ、スベタテ玉フ、天皇ノ聖壽萬歳、萬々歳。

竹ノ園生ノ色マシテ、大内山榮エユク、大内山榮エユク」

「イカニ、悪魔ハ我カ日本ヲシラサリシカ。八百萬ノ神等ガ守リマセル尊キ國、ドノヤウニシテウバイトラントセシモカナハズ。眞ノ妙法ノ劍モテ大倭日高見國鶏杜ニ坐ス建速素戔嗚命イデマセバ、八百萬ノ神等ガトモニ集ヒテ妙法ノ劍モテ出デマシ玉フ。我等、奇稻田姫命トトモニコノ高天原ニアリ、眞ノ妙法トナヘ悪魔怨敵退散ノオン題目ヲ供養ナサン。悪魔ヨハヤク退散セヨ。枉神モ神ナレバ、コノ尊キ日本ノ天皇ミニ心ナヤマスハ宇宙ノ大真理ニソムイテイルゾヨ。汝モ早く解脱セヨ。我等トモニ題目供養ヲナサン」題目、神樂。

「大八洲嶋、秋津嶋根ノ日本ノ、天皇ノ大稜威、八紘一字ヲ照スナリ、八紘一字ヲ照スナリ。アーメデタヤナーアーメデタヤナー」禮。

「倭姫、拙ナキワザニテ候ヒシガ、ミ神樂マヒオサメ候、オイトマツカマツル」

註 釈

①コノ山二樓ム

当時庄山（庄山）と言えは法主一家の住居であり、法主一家が大倭紫陽花邑を開くため須加の聖地に遷られた後は、ご両親が他の家族と共に住んでおられた。また、当時の地形は小高い山の中腹に家があり、裏手は山の連なりになり、現在の藤ノ木台の南端にあたる。

※法主が家族と共に須加谷（紫陽花邑）に入られたのは昭和22年10月30日。住居とされた大本宮の家屋（掘立、茅葺15坪）は昭和24年8月29日日出火全焼。

②山神

山を守る神。山をつかさどる神。（岩波書店『広辞苑』による）

ここでは大倭太加天腹には入っていない、いわば下級の霊（狐狸の類）の集団。法主はこの「山神」の司らしい狸霊に「宮丸大明神」と名付けて、小さなお社を作ってやり（昭和27年7月8日）法主の使いをさせておられた。

現在拝殿の神饌室にこのお社は祀られている。このお社の裏書きには「大倭七階座」と記されている。

後に禊会で名古屋の山田女史に憑った「宮丸さん」が階座の厳格な決まりのある所も「法主さんの使い」と言えはどんな階座の霊界でも入っていた」と言っていたのを思い出します。

（杉本）

③行

仏教で悟りを開くための修行。「題目を唱える行」「無言の行」等。

④コノ正シキ妙法ノ末座ニ加ヘトモニ出シクレン  
大倭太加天腹霊界の正しき緻密なる計画遂行

の末座に加え参加させてあげよう。

⑤吾ガコノオモイ

大倭の霊界と同様な和やかで安穩な大倭日高見国を現界にも生み出す大仕事への思い。

⑥コノ山ノ守護神トシテ祀ツテヤル

この鳥見庄山の裏山の守り神としてのお役目を与えて、お社の形で祀ってやる。

※註釈文②参照

⑦枉神

「枉」とは「まがる」「まげて」「まげる」と読めるが、「まがる」「よこしま」「ゆがめる」という意味がある。（『角川大辞源』による）

「まがつみ」というのは「禍罪」あるいは「枉罪」と表記するが「わざわい」「災難」という意味である。（小学館『日本国語大辞典』による）

⑧解脱

縛るものを離れて自由になる意。悩みや迷いなど煩惱の束縛から解放されて、自由の境地に到達すること。悟ること。涅槃。（小学館『大辞泉』による）

⑨八紘一宇

通常は「はっこういちう」と読む。「八紘」とは四方と四隅のことで、転じて、天下、全世界のこと。「宇」は屋根とか家のこと。世界を一つの家とすること。太平洋戦争期、日本の海外進出を正当化するために用いた標語。（岩波書店『広辞苑』による）

神武天皇が大和橿原に都を定めたときの神勅に「六合（くにのとも）を兼ねて都を開き、八紘（あめのした）をおおつて宇（いえ）と為（せ）ん」と、またよからずや」（『日本書紀』）。

ここにあるのは「八紘為宇」という文字であるが、昭和15年8月、第二次近衛内閣が基本国策要項で大東亜新秩序の建設をうたった際、「皇国の国是は八紘を一字とする肇国（ちようこく）の大精神に基づく」と述べた。これが「八紘一宇」という文字が公式に使われた最初である。（小学館『日本大百科全書』による）

また、参考のため同時代の法主の考える「八紘一宇」についての文章も引用しておこう。

《よく私のことは「大久保の怪物」と評されたものです。つかみどころがなかったのです。私のいう八紘一宇がかなり危険思想とみられたものか、あるいは為政者の行なっていることが私の八紘一宇の思想とかなりかけ離れていたためか、そのあたりに問題があったのでしょうか。満洲支那あたりの日本軍の最高指揮官であった陸軍大将松井石根さんや、朝鮮総督に赴いた陸軍大将小磯国昭さん等も八紘会の顧問でしたので、このような偉い方々のいる席上やその他で私はよく話したものです。

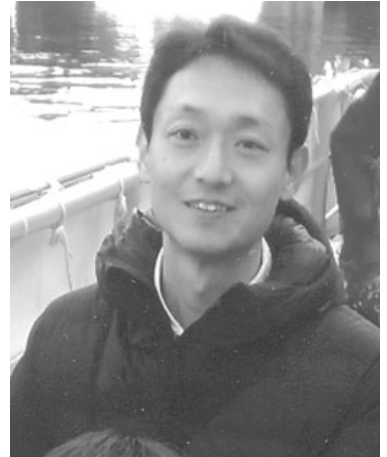
中でも、アジア民族がまず仲良くなるための聖戦なら、第一に日本民族が崇敬する天照大神は、日本内地以外にもつてゆくことはよろしくない。祭政一致の神意から考えてもです。

具体的にいえば、満州には満人のすべてが崇敬している彼らの民族神を祀り、彼らの手によって国を治めさせ、足りないところは我が国の者が手伝えよなのだ。朝鮮の場合も台湾の場合も、まず神様の祀り変えが先決問題など話すものだから、かなり頭にきた高官もあつたんです。《「ながそねの息吹」一わが半生を語る》171頁より）

# 寸 莎

第146回

山田 照久さん  
てるひさ



## 顕幽不二

今回登場されるのは山田照久さん。皆さんの中にはお顔を見て「あの方か!」と思いがちな人もおられると思うが、お名前までは知らなかったという人も多いかもしれない。ただ山田さんが神宮や拜殿でのお祭りの時には奉納される伍ビールには覚えがおりなのでは……。

山田さんは昭和48年2月5日に、父山田武さん、母弘子さんを御両親にして、現在の奈良市都祁白石町に誕生。祖父母等々を含めた大家族だった。都祁は太古、大和国中がヒロミと言われる湖であった頃、三輪の奥山での生活を主とする人々の中心地であったという。時を経て、ヒロミの水が退き、人々が山を下っていった時、都祁に留まった少数派が先祖の方々ではなかったかとの事。言わば法主の言われていた三輪におら

れたクシイナダ姫の父母アシナツチ、テナツチの御先祖の原郷の土地だったのではと言われる。

事実、実家の近くには、それを匂わす場所もあるとか。又、都祁の実家の周りには神地も多く「高貴な場所であり、大事にしなければいけない」との言い伝えもあり、そこでは「木を切つてはいけない。畑を耕じてはいけない」との決まりもあって、違反すると厳しいさわりがあった事も。現に山田さんのお母様が、その土地で焚き火をされた折には、それがあり、しかも本人のお母様にはなく、息子の山田さんが原因不明の高熱を出されたとの事。「他にも禁忌地即生活の場であった自宅近辺では、様々な言い伝え、きまり事があり、不可思議な事が日常茶飯事でした」と笑われる。又、御自身も小さい時から特殊な感覚があり、色々と思えないものが見えたりしたが、

それを親に言うと、親に気味悪がられたり恐れられたりしたので「次第に言えなくなつた」と語られる。

山田さんはそんな幼少期から20歳くらい迄を地元で過ごし、大学は東京の日本大学に進んで医療を学び、現在は奈良市内で医療関係の仕事をされている。今の御自分の御家族は妻の明子さんと二人の子供さん(一女一男)に恵まれ不思議のない普通の生活を送られている。

幼少期の地元での人に言えない体験が長らく封印されていたそんな折、ネットの地図検索で偶然見つけた大倭神宮が気にかかり、何度も実際に、車で神宮の周囲を回つたとの由。その度に、故郷の高貴な場所と感じた「同じ様な匂い」を感じ、怖くて内に入れたなかったが、魅かれるものがあつたとの事。ある時、知り合いになつた矢田坐久志玉比古神社の宮司さんに、宮司さんの母上が大倭の施設に入れ、後に亡くなったのだが、施設には良くしてもらつたと言われるのを聞き、大倭は「悪い所ではないのだ」との感想を持ち、3年前に思い切って神宮を直接たずねてみる事になる。たずねてみると、やはり御自分の氏神さんと同じ匂いを感じ、今迄以上に「気になって、気になってしょうがなくなつた」。同時に同じ頃、ネットで購入した法主

の著書『やわらぎの黙示』を読み、自身の体験と重ね合わせて大いなる安堵感に包まれる。続いて後に、『ながそねの息吹』を購入する為、紫陽花邑を訪れ、教務本庁の杉本さんと対面する事にもなる。

その後、『ながそねの息吹』も読了。御自分の体験と矢追家のそれとの類似性を確認、他人には言えなかつた様な思いに対して安心感を得る。家の周りが禁足地なのに生活の場である事と矢追家の話が重なり、増々大倭に魅かれ現在に至っている。度々、大倭のお祭りにはビールや缶チューハイをお供えになるのは何故なのかとお聞きすると「地元で、お祭りの後に行なわれる直会では、神宮さんと地元の人々、先祖の方々も一緒に酒を前に和氣調々とする姿を思い出して」との事だった。趣味は一人で近辺の山々に登り、その土地の神社等を巡る事や、自宅の庭の木の剪定をする事と言われる。又、水、塩、米、お酒をお供えし、毎朝、中臣祓詞を唱えたり、最近では大倭の祝詞を唱える事を日課とされている。幼い時から現界と霊界を同時に生き、悩み、その果てに大倭に到り着かれた現在48歳の山田さんに、顕幽両界を知り、その上で現界の生活を生きる新しい時代の人を見る思いがした。(聞き手 林修三)

# あじわい日記

12月11日 アライグマとの攻防は続いていて、山崎正知さんが瑞光院と拝殿の繋ぎ廊下に仕掛けた罠にアライグマがかかりました(13日に奈良市の農政課の引き取り)。

12月12日 午前8時から大倭墓地の大掃除、9時から紫陽花邑の大掃除。大勢の安宿苑職員さんが頼もしく…。

12月15日 大倭神宮月次祭。  
12月19日 午前10時半頃、四十万さんはじめ女性7人、男性1人が来て、拝殿で「法主、大倭の原点を語る」(約1時間40分)のDVDを見られました。

12月20日 午後、矢部后代さん(岡山市)、また伊藤裕司さん(神奈川県藤沢市)が来邑。  
12月22日 冬至で大倭の大晦日。大倭神宮、拝殿、紫陽花邑各所に門松が立てられ、日聖祭準備が行われました。

12月23日 大倭78年元日。午前10時から法主奥津城で挨拶。10時半から拝殿において日聖祭が行われました。引き続き邑内四カ所の守護霊にお参り。

12月26日 午前9時から大倭神宮大掃除。全国的に厳しい寒気のニュースだったが、案外暖かく午前中で終わりました。

12月29日 午後1時半から拝殿で宮崎賢監督の、長島愛生園と

の交流から生まれたドキュメンタリー映画「NAGASIMA SAKI」かくりの証言」上映。F1WC年末キャンプの学生はオミクロン株で集まらず2名だけ、Oや邑人約20人が参加。宮崎氏は平成29年度大倭会文化講演会の講師でした。

12月31日 午後1時から邑の男子により大倭神宮と拝殿の正月お供え準備が行われました。

夜11時40分から1年間の疲れ清めに1カ月を1回として12回、青山法義さんと山崎奈紀佐・将晴姉弟により大太鼓が打ち鳴らされました。

1月1日 午後1時から教長さんによる邑内の四神参りの後、2時から大倭神宮で年始祭が行われました。

1月5日 午前11時から拝殿において(備)大倭安宿苑、大倭印刷(株)、大倭殖産(株)、大倭大宮などの代表により事始めの会が行われました。

1月6日 大倭神宮月次祭。康米那さん(埼玉県飯能市)坂田浩康、洋美夫妻(大阪府大東市)、金澤秀郎さん(大阪府河内長野市)がお参りされました。

大倭安宿苑では、12月24日 各種団体の永年勤続功勞者に当法人からの記念品。(菅原園)

1月3日 書初め。(須加宮寮)

1月1日 大倭神宮に初詣。

## 表紙写真について

永仮 まゆり

この写真は、花柳鶴寿賀さんの夫の大江強さんが、2018年10月上旬に、珍しい雲が出ているなど、思わず車を止めて撮ったそうです。撮影場所は鹿児島県の奄美大島龍郷町「かがんばなトンネル」の円集落側より、とのこと。

ここはホエールウォッチングができるような場所、「かがんばなトンネル」は全長29メートル、秋分の日・春分の日前後に数日間夕日が入り、地元では「龍の目」と言われています。大江さんは、生まれも育ちも

(長曾根寮) 12月25日(特養) / 12月24・25日(デイ) クリスマス会。(茂毛路園) 12月24日 クリスマス会。(八重垣園) 12月より書道クラブを再開。

## 法主帰幽祭のご案内

日時 令和4年2月6日(水曜日)

●午後1時40分より法主様奥津城(おんつき)においてご挨拶をいたします。

●午後2時より大本宮拝殿においてお参り後、過去の12月23日の降誕祭の映像記録を見ていただき、その後教長さんのお言葉をいただきます。

密集・密接を避けるため、ご配慮・ご協力のほど、どうぞよろしくお願い致します。

宗教法人 大倭 教

奄美。今井大権現という神社を守っている家の方で、故郷の奄美に戻った鶴寿賀さんもその家で暮らしています。

▼編集部補足 鶴寿賀さんは、平成23年11月12日、「法主矢追日聖生誕百年記念の会」の奉納演奏会で「アマミ舞」を踊られ(写真)、また平成25年3月21日に拝殿や大倭神宮で日本舞踊

## 中止

●2月9日(水) 上欄参照。  
●2月13日(日) 午後2時より大倭大本宮拝殿にて。  
●2月15日(火) 午後2時より大倭神宮にて。  
●2月23日(祝) 午後1時20分より大倭神宮にて申孝祭が、2時より大倭大本宮拝殿にて月次祭が行われます。

●2月3日(木) 午後2時より大倭大本宮拝殿にて。  
玉緒祭は宇宙根本神霊と人間の本霊との結びを感じてお祭り。玉は命を、緒はひもを言う。  
●月次祭(大倭神宮)  
●2月6日(日) 午後2時より大倭神宮にて。  
●法主帰幽祭  
●2月9日(水) 上欄参照。  
●大倭会主催祝会  
●2月13日(日) 午後2時より大倭大本宮拝殿にて。

●2月3日(木) 午後2時より大倭大本宮拝殿にて。  
玉緒祭は宇宙根本神霊と人間の本霊との結びを感じてお祭り。玉は命を、緒はひもを言う。  
●月次祭(大倭神宮)  
●2月6日(日) 午後2時より大倭神宮にて。  
●法主帰幽祭  
●2月9日(水) 上欄参照。  
●大倭会主催祝会  
●2月13日(日) 午後2時より大倭大本宮拝殿にて。



「清姫は語る」を奉納されました。

あんない

申孝祭は、神武天皇が行った祭政一致の故事、鳥見山中の霊時を記念するお祭りです。